

世帯間の贈与交換にみる消費の論理と倫理
——ポーンペイ島におけるクリスマスプレゼントの事例から——

河野 正治
(東京都立大学)

1. はじめに

本稿の目的は、ミクロネシア連邦ポーンペイ島で毎年12月に行われているクリスマスプレゼントの交換を取り上げ¹、そのやり取りがいかなる人間模様を生み出しているのかを具体的な事例をもとに明らかにすることである。クリスマスプレゼントの交換は、ポーンペイ島における贈与交換の典型的な事例であるとともに、近年ではプレゼントとなる商品の購入に多額の現金が投じられることから、贈与経済と貨幣経済の接合の一端が垣間見られる場面でもある²。

ポーンペイ島における伝統的な経済領域と近代的な経済領域の関係性をめぐっては、筆者による研究(河野 2019a, 2019b など)も含め、位階称号と祭宴の実施を特徴とする同島の首長制の領域との関連に主な焦点が当てられてきた³。それらの研究に比べると蓄積は少ないものの、より日常的な文脈に着目した研究においても、伝統的な経済領域と近代的な経済領域の関係について報告がなされてきた。例えば、グレン・ピーターセンは、個人が商売を通じて獲得した富が当の個人による貯蓄や利潤の追求に投じられるのではなく、社会関係の網の目を通じて再分配されると論じている(Petersen 1986)。また、恩田守雄は、日本統治時代に始められた「ムシン」(*mwusing*)という小規模金融が日本の無尽講に由来しつつも、同島における「助け合い」(*sawaspene*)の諸実践の一部に組み込まれ、出資者による個人的な「私益を〔参加者の〕共益に代える役割」(恩田 2019: 59、括弧内筆者補足)を担っていると指摘している。筆者自身の研

¹ 本稿で取り上げるクリスマスプレゼントの事例については、ブタ肉の再分配に関する事例研究の背景説明として、その概要を紹介したことがある(河野 2016: 80-82, 2019a: 132-135)。また、別稿では、クリスマスプレゼントの購入に際して行われるツケ払いや給料の前借りに言及した(河野 2019b: 53-54)。本稿は、それらの論考では部分的に取り上げるにとどまっていたクリスマスプレゼント交換の詳細な事例を提示するとともに、世帯間の関係構築について議論するものである。

² 本稿で紹介する事例は、主に2009年から2012年にかけて断続的に25か月間行った長期調査の結果にもとづく。

³ それらの研究では、最高首長が島民による現金や商品の供出の見返りに高位の称号を授与するという図式で、首長と島民の互酬的な関係が再生産されること(Fischer 1974; 中山 1986 など)、最高首長が初物献上などの儀礼的機会を自らの金銭的な利益のために利用すること(清水 1999: 419)などが報告されてきた。

究でも、ファンドレイジングのためのチケット売買が、ムシンと同様に「助け合い」の論理に沿って実践されていること（河野 2019b）を明らかにしてきた。

加えて、清水昭俊やエリザベス・キーティングがポーンペイ島の儀礼経済を威信と名誉の経済として分析しているが（清水 1995; Shimizu 1987; Keating 1998; cf. 河野 2022）、筆者自身の研究でも示したように、これは商品や現金の贈与にも当てはまる（河野 2019a: 103-107）。具体的には、商品を入れる容器の大きさを変えたり、バナナの葉やココヤシ葉製バスケットで包んだりすることにより、贈り手の「男らしさ」(*ohi*) が表現されると同時に、受け取り手の「名誉」(*wahu*) が視覚的に表現されるのである。

これらの研究はさまざまな経済的なやり取りを対象にしているが、貨幣による売買が在地の伝統的な価値観を反映する諸実践への読み替えを通じて馴化される傾向に注目してきたと大まかに捉えられるだろう⁴。ただし、ポーンペイ島において典型的な贈り物である家畜や農作物は、現金と容易に互換できることから⁵、そのやり取りが周囲への再分配や「助け合い」ではなく、個人による金銭的な利益の追求に利用されるケースが少なくないこと（河野 2019a: 285-308, 2019b）にも十分に留意すべきである。そのため、貨幣や商品を用いたやり取りが利他的な振る舞いと利己的な振る舞いのどちらにも容易に転化しうることを念頭に置いたうえで、誰がいかにして富を獲得するのか、それを誰のためにどのように消費するのかを注意深く検討する必要がある。加えて、筆者が幾つかの論考で示してきたように（河野 2016, 2019a, 2022）、ポーンペイ島民による物財の交換や展示は個々の状況に応じて内容や手続きを変える柔軟な側面を持ち合わせており、一回的な実践とそれがもたらす即興的な効果にも注目する必要がある。

以下ではこれらの点も踏まえつつ、島民がクリスマスプレゼント交換という機会においていかに自らの富を投じ、いかなるやり方でどのようなプレゼントを贈与し、結果としてどのような関係性を築くのかを具体的な事例から検討する。

2. ポーンペイ島のクリスマス

2010年の人口調査によると、ミクロネシア連邦ポーンペイ島には、34,789人が暮ら

⁴ オセアニア島嶼部の他の社会に関する研究でも、同様の傾向が指摘されてきた。サモアにおいて海外からの送金を含めた現金の贈与が儀礼交換の規範に沿って使用されること（山本 2018）や、フィジーのカヴァ飲みにおける金銭の支払いが親族内の互酬の論理に合わせて実践されていること（Toren 1989）は好例である。こうした在来の秩序による貨幣の飼い慣らしについて、人類学の領域では、商品化に対する抵抗という説明がなされることもある（cf. Miller 1995: 145）。

⁵ ポーンペイ島における贈り物や儀礼財は、日常的には売買可能な物が使用されることから、例えばヤップ島の石貨が譲渡不可能な履歴や痕跡を持つために売買が不可能であること（牛島 2002）などと比べると、現金や商品への互換が容易である。

している（Division of Statistics, FSM Office of Statistics, Budget, and Overseas Development Assistance and Compact Management 2012: 8）。オセアニア島嶼部の多くの社会と同様、今日のポーンペイ島民のほとんどはキリスト教徒である。その大半がカトリック教会もしくはプロテスタント教会に属しており、毎週日曜日の礼拝に参加するほか、より敬虔な信徒はそれ以外の機会にも教会活動に携わる⁶。12月24日の夜と12月25日の朝には島内各地の教会で礼拝が行われ、牧師や神父による説教や、参加者による讃美歌の合唱のほか、聖体拝領などの儀式も実施される。

クリスマスの礼拝の前後、ポーンペイ島では至る所でクリスマスのイベントが開催される。これらのイベントは親族の集い、職場や学校、キリスト教会の集いなど、さまざまな場面で実施されるが、その中心的なやり取りがプレゼントの交換である。

このプレゼント交換の特徴は、くじ引きや話し合いなどの手段で、プレゼントを贈る相手を事前に決めておくことである。プレゼントを贈る相手は2種類の方法で決められる。1つはポーンペイ語で「ポポキ」(*popoki*) と呼ばれる作法で、贈る相手と贈られる相手が異なるパターンである。もう1つは「ベリアリ」(*peliali*) と呼ばれる作法で、贈る相手と贈られる相手が同じパターンである。

11月頃になると、島民たちはその年のクリスマスのイベントについてミーティングの場を設ける。公式の集まりというよりは、むしろ何かのついでに話し合われる傾向にある。このミーティングの機会に、その年のクリスマスプレゼント交換の形式として「ポポキ」が採用されるのか、それとも「ベリアリ」が採用されるのかが確定し、くじ引きなどによりプレゼントを贈る相手も決められる。単にプレゼントを贈るだけではなく、さまざまな要素をつけ加えようとする場合もある一方、金銭的な事情や人間関係のこじれなどの問題によりクリスマスのイベント開催自体が見送られる場合もある。

そして、12月頃になると、島内の個人商店やスーパーマーケットではクリスマスセールがなされ、多くの島民が衣類や食品を中心にクリスマスプレゼントを購入する。なかでも島内唯一の都市部であるコロニア (*Kolonia*) では、クリスマスセールが活発に行われ、コロニアに向かう道路が至る所で自動車渋滞になるほどである。

島民たちは、公務員のほか、ホテル・商店など民間の賃金労働、農耕や漁業などにより生計を立てる。コロニアに近い島の北部では相対的に賃金労働者や公務員が多い傾向にある。自らの収入の範囲内でプレゼントを用意する者がいる一方⁷、アメリカ本

⁶ 2000年の人口調査によると、島民人口の約56%がローマ・カトリック教会、約34%がプロテスタント教会（会衆派のユナイティッド・チャーチ・オブ・クライスト教会）に属する。その他の宗派・宗教にはペンテコステ派のアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教会や、末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教会）などが含まれる（Division of Statistics, Department of Economic Affairs 2002: 54, 315）。

⁷ 中央銀行と自国の通貨のどちらも有さないミクロネシア連邦は、通貨として米ドル

土などに移住した親族からの海外送金を待つ買物に臨む者や、銀行を訪れてクリスマスプレゼント用にローンを組む者、翌月分の給料を前借りして買物に臨む者もいる。ポーンペイ島では日常的にも頻繁に贈与交換がなされているが⁸、そのなかでも、クリスマスプレゼントの交換は多額の現金が投じられる特別な機会である。

3. ポポキとベリアリ——クリスマスプレゼントが紡ぐ関係性

本章では、クリスマスプレゼントがいかに関係性のかを、筆者が実際に観察した事例から見ていく。事例の舞台は、ポーンペイ島の北東部に位置する、センペーン (Senpehn) と呼ばれる場所である。なお、登場人物の名前はすべて仮名である。

筆者の調査当時のセンペーンには、ベニート (2009年当時 59歳・男性) を長男とする 5人の兄弟が、父親から分割相続した土地に各々世帯を構えて居住していた。彼らはその地名を冠して「センペーンの人々」(mehn Senpehn) と呼ばれる。本稿の登場人物の親族関係は図1の通り、「センペーン」の各世帯の収入等は表1の通りである。

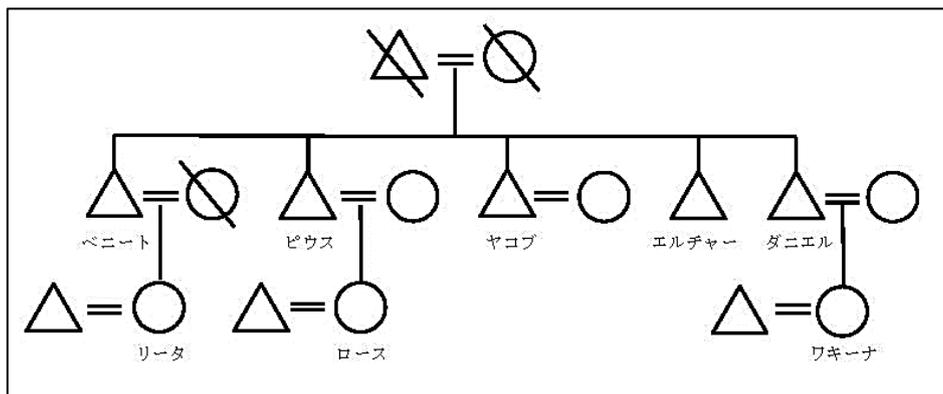


図1 登場人物の親族関係

を使用している。最低賃金は時給 1.75 ドルであり、多くの島民にとってクリスマスプレゼントは高い買い物である。

⁸ 例えば、病気の見舞い、薬草治療へのお礼、1歳の誕生日の祝いなどの機会には、農作物や商品がココヤシ葉製バスケットやボウルなどに詰められて贈られる。

家長	世帯人数	職業/収入源	推定月収 (米ドル)
ベニート	12	社会保障による収入(家長) 貨物船船員(息子) ホテル従業員(息子)	400 280+残業代 400
ピウス	7	ホテル食堂の料理人(家長) ホテル従業員(娘の夫) 大使館警備員(息子)	800 440 480
ヤコブ	6	短大食堂の料理人(家長) タクシー運転手(息子) ホテル従業員(娘)	800 — 400
エルチャー	5	大使館職員(家長) 小学校教員(娘)	1400 600
ダニエル	8	貨物船船員(家長)	700+残業代

表1 「センベーンの人々」の世帯別の生計状況(2011年12月時点)

ピーターセンによると、ミクロネシアの比較的大きな島では、島民の居住パターンは集村というよりも、むしろ散村の形態を取る(Petersen 2009: 86)。今日のポンペイ島では、兄弟姉妹などの近親から成る数軒の世帯が密集して暮らし、例えば「センベーンの人々」などと呼ばれる近隣集団を形成する一方で、各々の近隣集団同士は多少なりとも地理的に離れた場所に居住している。そうした地理的条件に加え、近隣集団が基本的には近親によって構成されることから、食物の贈与や物財の貸借、建築の手伝いなどの相互扶助的なやり取りが、近隣集団内でより活発になされる傾向にある。

以下では、そうした近隣集団の1つである「センベーンの人々」が2009年と2011年にそれぞれ実施した2つのクリスマスプレゼント交換の事例について検討する。片方は贈る相手と贈られる相手が異なるポポキ形式の交換であり、もう片方は贈る相手と贈られる相手が同じベリアリ形式の交換である。

ポポキ形式のクリスマスプレゼント

2009年12月25日の昼過ぎ、ベニートの一家のもとに、次男ピウス(当時56歳)の一家、三男ヤコブ(当時51歳)の一家、五男ダニエル(当時46歳)の一家が集まり、クリスマスのイベントが催された。四男エルチャー(当時49歳)の一家は上記の4つの一家と隣接した世帯に暮らしていたが、当時はダニエルの一家と折り合いが悪かったことから、このイベントには顔を出さなかった。

ベニートの屋敷で11月頃に行われた話し合いで、この年のクリスマスはポポキ形式でプレゼント交換が行われることが決まった。具体的には、ピウス一家はベニート一家に、ベニート一家はダニエル一家に、ダニエル一家はヤコブ一家に、ヤコブ一家はピウス一家にそれぞれプレゼントを贈ることになった。各家族は当日までに商店やスーパーマーケットを回って買い物をし、それぞれにプレゼントを用意した。

写真1は、ダニエル一家からヤコブ一家に贈られたクリスマスプレゼントである。写真を見ると、各種プレゼントが木を組み合わせた台の上に乗せられていることがわかる。こうした贈答用の台はポーンペイ語で「ベイクニ」(*peikini*)と呼ばれ、大規模な贈与をする際に用意されるものであり、ココヤシ葉製バスケットなどを用いた贈与よりも価値が高いとされる (cf. 河野 2019a: 271)。写真1の「ベイクニ」の上には、数袋のコメやケース入りの缶ジュースが置かれ、それらを囲うように20着近いTシャツと50個近いマグカップによる飾り付けがなされている。

1つ1つは取り立てて高価な物ではなく、彼らの日常生活でも使用される物である。だが、それらを大量に集めることにより、見る者の目を奪う「大きな」(*lapala*)贈り物となる。さらに、大規模な贈与の際に通常用いられる「ベイクニ」の形態で贈与をすることにより、相手に敬意を示すのに十分な贈り物になると同時に、クリスマスにふさわしいプレゼントになるのである。



写真1 プレゼント用の台の上に乗せられたクリスマスプレゼント
(2009年12月25日筆者撮影)

写真2は、ピウス一家からベニート一家に贈られたクリスマスプレゼントである。ココヤシの葉で作られた大型のバスケットに、左から順にケース入りの缶ジュース、ケース入りのインスタントラーメン、枕、洗剤、お菓子の詰め合わせ、トイレトペーパー1パック、タバコ1カートン、ビンロウジの実が詰められている。クリスマスの場面に限らず、大型バスケットを用いた贈与は、通常のサイズのバスケットを用いた贈与よりも価値が高いとされる。写真2のプレゼントは、写真1と同様に、日常生活用品を大量に集めてココヤシ葉製の大型バスケットで包むことによって、「大きく」見栄えのするプレゼントを贈与することに成功していた。



写真2 ココヤシ葉製バスケットに詰められたクリスマスプレゼント
(2009年12月25日筆者撮影)

ベニート一家からダニエル一家に、ヤコブ一家からピウス一家に対しても、同様にクリスマスプレゼントが用意された。これらの世帯間のプレゼントの交換に加えて、当日は子どもたちにもプレゼントが用意された(写真3)。これも事前の話し合いを踏まえて子どもたちの間で交換パートナーが決められたものであり、大人たちと同様に、世帯間で交換がなされた点が特徴である。この中身は学校で使用する勉強道具やお菓子の詰め合わせなどであり、子どもたちが日常的にも使用するものである。



写真3 子どもたちのために用意されたクリスマスプレゼント
(2009年12月25日筆者撮影)

当日はこれらのプレゼント交換に加えて、カヴァ飲み⁹を伴う共食や、屠殺したブタ肉の再分配も行われた。また、MD プレーヤーから流れる洋楽に合わせて皆が自由に踊ったりするなど、4つの世帯が一堂に会して楽しい時間を過ごしたのである。

ベリアリ形式のクリスマスプレゼント

2011年12月25日にベニートの屋敷で催されたクリスマスのイベントは、ベリアリの形式で行われた。事前の話し合いでは、1つの夫婦と別の夫婦が交換パートナーとなって互いにプレゼントを贈り合うことが決められ、くじ引きにより計7組の交換パートナーが誕生した。さらに、子どもたちも大人たちと同様に、クリスマスプレゼントを贈る相手をくじ引きで決め、世帯を越えた16組の交換パートナーが生まれた。

パートナー同士がプレゼントを贈り合うのみならず、それぞれの夫婦が用意するプレゼントの出来栄を競う企画も設けられた。当日の参加者のうち最年長の3名が審査委員を務め、クリスマスプレゼントとブタとカヴァの樹の「大きさ」について判定を下し、それぞれについて最も「大きな」物を提供したパートナーに賞金が贈られることになったのである。

各々のパートナーが12月初旬頃からクリスマスプレゼントの準備を始め、当日はベニートの屋敷地内で各自のプレゼントが披露された。カヴァ飲みを伴う共食がなされるなか、司会を務めたヤコブによってプレゼント競争の結果が公表され、数人の年長者がクリスマスのイベントを祝う演説を行った。最後に、屠殺されたブタ肉が再分配され¹⁰、イベントは無事に閉会した。以下の記述では、クリスマスプレゼントの中身について詳しく紹介したい。

写真4はリータ（当時35歳・女性）とその夫が、ワキーナ（当時19歳・女性）とその夫のために用意したプレゼントである。リータはベニートの娘であり、ワキーナはダニエルの娘である。ともに婚出しており、クリスマスのイベントのために生家に帰ってきていた。

⁹ カヴァとは、オセアニア島嶼部で広く栽培されるコショウ科の灌木であり、その根から抽出される液体は同地域の複数の社会で日常的かつ儀礼的に飲用されている。ポーンパイ語ではシャカオ (*sakau*) と呼ばれる。

¹⁰ このブタ肉の再分配を取り上げた拙稿では、再分配が必ずしも称号の位階に沿った「名誉」を可視化するわけではなく、むしろ状況に応じた多様な人物評価に開かれていることを論じた（河野 2016: 80-82, 2019a: 132-135）。



写真4 リータ夫妻が用意したクリスマスプレゼント
(2011年12月25日筆者撮影)

このプレゼントの特徴は、プレゼントを並べるための簡易的な小屋を建て、見栄えの良さを演出した点にある。小屋の中にはコメや衣類などが置かれたが、とりわけ枕や女性用のスカートは、相手が喜ぶだけではなく、プレゼントに彩りを加えるのに役立った。このように、リータ夫妻が単にプレゼントを購入するだけではなく、その見せ方を工夫して見栄えの良い「大きな」プレゼントを用意した点も特筆すべきである。こうした工夫を通じて、リータ夫妻はこの日のイベントで最も「大きな」プレゼントを贈った夫婦であると審査委員3名から判断され、賞金25ドルをもらった。

しかし、リータ夫妻は個人商店で「ツケ払い」(*pweipwand*)をして食料品などを購入したことに加え、この日のために翌月の給与をすべて前借りし、プレゼント交換に備えていた (cf. 河野 2019b: 53-54)。筆者の調査から、当時のリータ夫妻の世帯の月収はおよそ600ドルであったと推定される。そのため、彼らは賞金よりもはるかに多くの金額をプレゼントの購入に費やしていたことになる。プレゼントへの投資により、翌月のリータ夫妻の生活は困窮し、他の世帯に食事を依存するほどであった¹¹。

写真5はロース(当時32歳・女性)とその夫が、ヤコブとその妻のために用意したプレゼントである。ロースはピウスの娘である。

¹¹ 他の世帯の人間に食事を提供することも、「センベーンの人々」にしてみれば「助け合い」の一環であり、そのような土壌があるからこそ、リータ夫妻がクリスマスプレゼントに多額の現金を投じることが可能になったともいえる。



写真5 ロース夫妻が用意したクリスマスプレゼント
(2011年12月25日筆者撮影)

ロースの夫の稼ぎが少ないことから、夫婦は経済的に苦しくピウスの一家と同居していた。多くの者がコロニアのクリスマスセールで商品を購入した一方で、金銭的な余裕がないロースの夫は都市部のコロニアではなく、畑と海に行ってプレゼントとなる農作物や海産物を採したのである。彼らのプレゼントは主に農作物と海産物から構成され、その目玉はウミガメであった。加えて、ロース夫妻もリータ夫妻と同様に、簡易的な小屋をつくり見栄えを良くすることに力を入れていた。とはいえ、多額の現金を費やしたリータ夫妻が簡易的な小屋をビニールシートで覆ったのに対して、金銭的に苦しいロース夫妻の場合にはココヤシの葉で屋根を作ったという違いがある。

写真6はヤコブ夫妻がロース夫妻に贈ったプレゼントである。「センベーンの人々」の中で最も「大きな」ブタを用意できたヤコブ夫妻は、洋服店で働く妻の尽力により大量の衣服を用意することにも成功し、ブタの賞金に続いて、プレゼントの賞金も虎視眈々と狙っていた。リータ夫妻のプレゼントが最も「大きい」と判断されたため、結果としてヤコブ夫妻は賞金を獲得できなかったが、ヤコブ夫妻が用意したプレゼントも当日の参加者からその「大きさ」を評価されていた。



写真6 ヤコブ夫妻が用意したクリスマスプレゼント
(2011年12月25日筆者撮影)

他方で、写真6にも映っているように、ヤコブ夫妻が用意したプレゼントの中には、ブルーシートの上に置かれたセメントとブロックがあった。ポーンペイ島では、日常的にも家屋の拡張はセメントやブロックを用いて自力で行う場合が少なくない。セメントとブロックの贈与は、ピウス夫妻と同居するロース夫妻に対して、家屋を拡張して自らの生活スペースを作りなさいという、ヤコブ夫妻からの隠れたメッセージであった。つまり、30歳を超えてもなかなか自立できないロース夫妻に対して、いつまでも生活と住居を両親に依存しないようにすることを促すための実用的な贈り物であったといえる。

結果として、ロース夫妻はヤコブ夫妻からの隠れたメッセージに感謝しつつも、同居するピウス夫妻に気を遣ったのか、なかなか家屋の拡張は行われなかった。他方で、ヤコブ夫妻はロース夫妻が用意した小屋の出来栄えに感心した。そこで、カヴァ飲みが好きなヤコブはこの小屋をカヴァ飲み用の小屋として自らの屋敷地内に設置した。クリスマスのイベントからしばらくのあいだは、時にロース夫妻も交えてこの小屋でカヴァ飲みが行われ、予期せぬ形で世帯間の交流がなされることになった。

4. おわりに

本稿では、ポーンペイ島のクリスマスに際していかにプレゼントが交換されるのかを、複数の世帯が関与するプレゼント交換の事例から検討してきた。以下では、これらの事例をもとに、クリスマスプレゼントの交換がどのような特徴を持っているのか、当事者たちがなぜどのようにクリスマスに財を投じるのか、それがいかなる人間模様を生み出しているのかといった点について考えたい。

まず、プレゼントの交換の形式には、贈る相手と贈られる相手が異なる「ポポキ」と、贈る相手と贈られる相手が異なる「ベリアリ」の2種類がある。財の流れだけを見るならば、前者はレヴィ＝ストロースのいう一般交換、後者は彼のいう限定交換という区分に相当する。レヴィ＝ストロースは自家消費の禁止に他者との互酬的な交流が発生する契機（レヴィ＝ストロース 2000: 145-151）を見たが、本稿の事例でもクリスマスプレゼントの相手が世帯内に限定されないことによって、世帯間での贈与交換が実現されていると理解できるだろう。世帯を越えて交換されるプレゼントは、日常的には相互扶助的な「助け合い」で結ばれている世帯と世帯の関係を、さらに維持・強化する機能を担っているといえる。

次に、ベリアリ形式のクリスマスプレゼント交換は、世帯を越えた交流に加えて、世帯間での競争を要求するものであった。具体的には、贈り物の量とその見栄えの工夫によってプレゼントの「大きさ」を競うように表現することにより、個々のパートナーがクリスマスに賭けたエネルギーと財力が可視化されるという方法が取られていた。そこでは、リータ夫妻が行ったように、給料の前払いなどの方法を駆使することで多額の現金を集め、普段の給料では賄えないほどの多額の現金を投じて「大きな」プレゼントを購入するケースがあった一方で、ロース夫妻が海産物や農作物によってプレゼントを製作したように、クリスマスセールの商品が手に入らない場合には、ありあわせの素材を用いてプレゼントの「大きさ」を示すという創意工夫もなされていた。クリスマスプレゼント交換の場はまさに自らの威信を賭けた戦いの場であり、プレゼントの「大きさ」を表現するために懸命の努力がなされるのだ。

これらの方法は、現金を投じるか否かの違いはあれ、贈与物の「大きさ」を通じて自らの威信と他者への敬意を示すという点で、冠婚葬祭などの祭宴に見られる交換と展示のやり方を利用したものである。ポポキ形式のプレゼントが「助け合い」の関係性を維持・強化していたことも合わせて考えると、クリスマスプレゼントの贈与交換の論理は、互酬的なやり取りによる「助け合い」や贈与物の「大きさ」による威信と名誉の表現といった日常的かつ儀礼的な贈与交換の論理の延長にあることがわかる。

他方において、本稿の事例の登場人物たちは「大きさ」のみを追求していたわけではない。ピウス一家からベニート一家に贈られたプレゼントのなかに、ベニートが愛好するタバコとビンロウジが添えられたように、プレゼント交換の場は個々の交換パートナーの事情に合わせて、相手に対する配慮を示す場でもある。また、ヤコブ夫妻がロース夫妻にセメントとブロックを贈ったように、より踏み込んだ形で相手に配慮するメッセージが伝えられる場合もある。

プレゼントの「大きさ」が賞金の獲得につながることもわかるように、競争のなかでは自らの威信を高めるという意味での自己の利益が追求されることも想像に難くない。それに対して、これらの物を贈る行為は必ずしもプレゼントのサイズや見栄えに反映されないことから「大きさ」を追求する行為ではなく、贈与交換をめぐる在

地の論理に従っているわけでもない。むしろ、相手ありきの一回的な行為であり、交換パートナーや交換される状況が異なれば反復されない行為である。こうした行為は、既存の贈与交換の論理の中で重視される価値とは異なる価値を打ち立てるという点で、価値志向性を有する行為である。あるいは、他者への配慮にかかわる倫理的実践とみなすこともできるだろう (cf. 河野 2019a: 303-307)。

以上の検討より、クリスマスプレゼントの交換の場は、在地の伝統的な贈与交換の論理に沿って世帯間の関係と個々人の威信を維持・強化する場でありながら、必ずしもそうした論理に収斂されない、交換相手をめぐり一回的で個別的な状況への配慮に開かれた創造的な実践の場でもあると暫定的に結論づけられるだろう。

クリスマスプレゼントの交換がつくる人間模様は、競争に勝ったリータ夫妻が翌月に困窮したことからもわかるように、必ずしも金銭的な利益につながるものではない。むしろ、世帯間の関係構築と不可分な実践であり、その意味では人間関係上の利益にかかわるものである。そのような人間関係上の利益と不利益がいかによどのような方向性で達成されるのか、そうした実践の積み重ねのなかで同島の社会と経済がいかに関わるのかといった点を、今後の継続的な検討課題としたい。

付記

本稿のもとになった研究は松下幸之助記念財団研究助成と筑波大学研究基盤支援プログラム、JSPS 科研費 (20K13278) からの援助により可能となった。ここに記して感謝したい。

参考文献

牛島巖

2002 「携えるカネ、据え置くカネ——ヤップの石貨」小馬徹 (編) 『くらしの文化人類学 5——カネと人生』 pp. 76-99、雄山閣。

恩田守雄

2019 「南洋群島の互助慣行——パラオとポンペイを中心に」『流通経済大学社会学部論叢』 30(1): 1-27。

河野正治

2016 「多様な『名誉』を可視化する——現代ミクロネシア・ポーンペイの首長制にみる『位階秩序』の実演と創造」『文化人類学研究』 17: 66-90。

2019a 『権威と礼節——現代ミクロネシアにおける位階称号と身分階層秩序の民族誌』風響社。

2019b 「今日の首長制にみる負い目と負債のもつれあい——ミクロネシア連邦ポーンペイ島の事例から」『白山人類学』 22: 39-59。

2022 「食物展示の意味をずらす技法——ミクロネシア・ポーンペイ島の儀礼実践にみる価値転換と創造の萌芽」『社会人類学年報』 48: 1-19。

清水昭俊

1995 「名誉のハイアラーキー——ポーンペイの首長制」清水昭俊 (編) 『洗練と粗野——社会を律する価値』 pp. 41-55、東京大学出版会。

1999 「慣習的土地制度の外延——ミクロネシアの比較事例から」杉島敬志 (編) 『土地所有の政治史——人類学的視点』 pp. 409-428、風響社。

中山和芳

- 1986 「ポナペ島社会における伝統的リーダーシップの変容の予備的考察」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会（編）『社会人類学の諸問題』pp. 59-84、第一書房。
- レヴィ＝ストロース、クロード
2000 『親族の基本構造』福井和美（訳）、青弓社。
- 山本真鳥
2018 『グローバル化する互酬性——拡大するサモア世界と首長制』弘文堂。
- Division of Statistics, Department of Economic Affairs
2002 *FSM National Detailed Tables: 2000 FSM Census of Population and Housing*. Palikir: Federated States of Micronesia.
- Division of Statistics, FSM Office of Statistics, Budget, Overseas Development Assistance and Compact Management
2012 *Summary Analysis of Key Indicators from the FSM 2010 Census of Population and Housing*. Palikir: Federated States of Micronesia.
- Fischer, John
1974 The Role of the Traditional Chiefs on Ponape in American Period. In Daniel Hughes and Sherwood Lingenfelter (eds.), *Political Development in Micronesia*. pp. 167-177. Columbus: Ohio State University Press.
- Keating, Elizabeth
1998 *Power Sharing: Language, Rank, Gender and Social Space in Pohnpei, Micronesia*. Oxford: Oxford University Press.
- Miller, Daniel
1995 Consumption and Commodities. *Annual Review of Anthropology* 24: 141-161.
- Petersen, Glenn
1986 Redistribution in a Micronesian Commercial Economy. *Oceania* 57(2): 83-98.
2009 *Traditional Micronesian Societies: Adaptation, Integration, and Political Organization*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Shimizu, Akitoshi
1987 Feasting as Socio-Political Process of Chieftainship on Ponape, Eastern Carolines. In Iwao Ushijima and Kenichi Sudo (eds.), *Cultural Uniformity and Diversity in Micronesia*, pp. 129-176. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Toren, Christina
1989 Drinking Cash: The Purification of Money through Ceremonial Exchange in Fiji. In Jonathan Parry and Maurice Bloch (eds.), *Money and the Morality of Exchange*, pp. 142-164, Cambridge University Press.